

表記の整理について

原稿は印刷用のレイアウトに合わせる前の段階で校正的な仕事を終わらせておかななくてはならない。ここでは横書き学術論文の場合に絞って説明する。

● 文体の統一

「である」、「する」に統一。口語体、特に擬音語・擬態語を使わない。

尊敬語・謙譲語・丁寧語などを使わない。

例) 成田[2002: 12]によると (成田教授の御高説では[成田 2002: 12])

括弧内の表現は皮肉と受取られるのが普通で、むしろ失礼である。「成田教授によると」としないで、「成田一郎の何々論文によると」とした方がよい。

● 漢字の使用範囲

当て字、接続詞などは出来るだけ平仮名とする

例) やはり (矢張り)、かなり (可成り)、しかし (然し、併し)、なお (猶、尚)、どこどこにおいて (於て)、ところが (所が)、わざわざ (態々)、やが (臈) て

本来の意味を失い、助辞的に使われているものは仮名で書く

例) 何々すること (事) がある、正しいもの (物) と考える、何々と書いてある (有る)、今外出している (居る)、何々のために (為に)

無理に易しい漢字にする必要はない

例) 稀少 (希少)、闇夜 (暗夜)、月蝕 (月食)、生歿 (生没) 年、刺戟 (刺激)

しかし、賃金 (賃銀の読みだけ残った) のように定着してしまったものはこの限りでない。漢字が難しいからといって避けてはならない。常用漢字になくても JIS にあればよい。

例) 胃癌 (胃ガン)、語彙 (語い)、湿疹 (湿しん)、失踪 (失そう)、茫然 (ぼう然)
常用漢字とは無教育の人に苦勞をかけないために設けられたもので、常用漢字以外の文字の印刷を禁止したものではない。ちなみに、メートル法以外の物差の製造販売は禁止されている。年齢を表す「歳、才」は前者を原則とし、後者は表組など小活字の場合に使う。

UNICODE (新旧漢字、共産中国の簡体字を含む) がない漢字はなるべく避ける。

● 漢字の字体

本文は新字体、新仮名遣い。ワープロ原稿では偏や旁の不統一は許されるが (JIS そのものが不統一だから) 印刷所はそれらを統一する義務がある。「遅しい」は JIS (通産省所管) 第 2 水準、「述べる」は同第 1 水準。常用漢字表 (文部省所管) の之繞はすべて点 2 個。

● 送り仮名

変化部分を全部仮名にするか、旧仮名遣い風に通じる程度に短い送り仮名にするかは自由。ただし、統一が必要。

例) 立ちあがる、立ち上がる、立上がる (「立上る」は「たちのぼる」と誤解されるので不可)

● ルビ

難読漢字はルビを振らず、文末註にするか、

例) 南方熊楠 (みなみかたたくまくす)

とパーレンと小活字で代用する。

● 繰返し記号

国々でも国々でもよい。しかし、国々の方が普通。「珍味々々」のようなものとか、仮名の繰返し記号 (あゝ、たゞし) は許されない

● 引用文の表記

原文のままとする。たとえば引用原文に「斗争・劳伤」などとあれば、原文どおりにする。歴史的文書の参照の場合は旧字体、旧仮名でよいが、UNICODE にない字体や変体仮名は避ける。引用文の中の強調体(ゴチ・下線)は、引用末尾で「強調体は原文」と断る。

ルビは捨ててもよい。

なお、英国の本を米国で引用する時は米国式綴りにするのが普通で、日本の習慣と非常に異なる。

● 外来語・外国の固有名詞の表記

一般の外来語は外来語辞典に掲載の表記とする。

例) オックスフォード、ケンブリッジ、バーミンガム (オックスフォード、ケイムブリッジ、バーミンガム)。インドりんご (インディアナ林檎)、ロンドン (倫敦)

専門語の場合、執筆者の所属する専門分野で定着している外来語表記を用いる。

例) バルト艦隊 (バルチック艦隊)。ロシア語の専門家の間ではロシア語、一般では「ロシア語」。

● 外国人の人名

そのまま片仮名とし、区切りはスペースとする (「アダム スミス」) か中黒とする (「アダム・スミス」)。ハイフンやダブルハイフンは苗字でハイフンを含んでいるがあるので、不都合。日本で定着している表記でもひどい間違いの場合は多少の訂正は許される (「ウェーバー」でなく「ヴェーバー」。「ペーバー」も可能だが学界で用いられた前例がないので不可)。しかし、「ギョエテとは俺のことかとゲーテ謂い」と揶揄されないように節度が必要である。

● 学術用語の表記

当該学界の慣用による。経済学の場合、『経済学大辞典』に載っている用語を使う。

● かぎや括弧および句読点

和文では「『』」を用い、欧文では ‘ ’ “ ” (6 9 型クオート)を用いる。

かぎあるいはクオートのなかにかぎあるいはクオートがくるとこれら 2 形を交互に使う。最初に使うクオートがシングルなのかダブルなのかは英米で異なる。

和文では論文名は「論文名」とし、書籍や雑誌名は『国富論』と使い分ける。

なお、かぎで上下が横のように短い形のは印刷では一般的であるが、JIS コードにない。

欧文では論文名はダブルクオートで囲み、書籍や雑誌名はイタリック体を用いる。

ドイツ語やフランス語の場合はそれぞれの言語の引用符を使うこと。„deutsche”、«français»

パーレンは語句の補足的説明（パーレンとはこの語句を囲っている記号である）とか小見出しの番号を付けたりするのに用いる。パーレンの中を小字にしてもよい。

ブラケットは論文の引用箇所のみ示すや欧文で引用文の内部で引用者が注釈を加える場合に使う。

例) [加藤 2001: 122]とか He [i.e. John Smith — Y.T.] was conspicuously absent.

亀甲は和文で引用文中に引用者が注釈を加えるのに使う。

例) 山田太郎は「甚しく残念なのはあの男〔引用者注：加藤一郎〕が来なかったことである」と書いている。

和文では全角のコンマとマル、欧文ではコンマとピリオドを使う（和文のコンマは欧文のより大きい）。

● つなぎ符号

和文の場合、「から…まで」を表す場合や複合語の連結に全角ダッシュを使い、文中に語句や文を挿入するときは2倍ダッシュを使う。

例) 「東京—大阪間を歩く」、「えてして——とも言えないが——発生しがちである」

欧文の場合、範囲を示すのは en rule、会話の入れ替わりを示したり、説明をするのは em rule である。

例) pp. 213–215; — I'll do my best.

厳重に注意すべきことは、ハイフン記号（-）やマイナス記号（-）とは全く別だということである。ハイフン記号とマイナス記号はパソコンのキーボードでは同一物であるが、印刷では別物で、マイナス記号のほうが横長である。

このような特殊記号を MS Word®で使うには「挿入」→「記号と特殊文字」で出てくる記号表を利用して入力する。

● 単位記号

㍎ というような特殊記号を使わないこと。「3メートル」か「3 m」とすること。

● 数字

「一石二鳥、一発勝負」のような慣用句を除いて算用数字を使うこと。全角文字は不可。

例) 一戸建の2階で、千円札5枚

「3月、三月、三つき」を「みつき」と読ませるのは困難なので、「3か月」と書換える。

数の範囲を示す時、桁の省略をしないこと。

例) 18—19世紀（「18—9世紀」は不可）

● 名詞（地名・人名など）の並列法

「早稲田・慶応・学習院」でも「早稲田、慶応、学習院」でもよい。

● 書誌情報の並べ方

出版年度を著者名のすぐ次に書く点を除けば図書カードの書き方と同じである。

ハーバード方式の論文引用表記を取るのであれば、出版年度は出版社名の次に来る。

和文書籍の場合その次に『書名』、版番号（書かなければ初版である）、出版社名、総ページ数を書

き、和文雑誌の場合、「論文名」、『掲載誌名』、当該ページの範囲を書く。

欧文書籍の場合も同様だが、かぎ括弧の代わりにイタリック体とかダブルクォートを使う点がまず異なる。出版社の名前の前に、出版した都市名を書く点も異なる。なお図書カードの場合は菊判八切だの crown octavo だのとページのサイズも記入する。

● 欧文書名・論文名における大文字

最近の科学論文では先頭の文字以外で大文字になるのは固有名詞のみである。ドイツ語やフランス語ではこの方式である（ドイツ語では名詞はすべて大文字で始まる）。しかし、伝統的な方式はややこしく、冠詞・前置詞・人称代名詞・接続詞以外の語の最初の文字を大文字にする。

書籍名や雑誌名はこの伝統に沿い、雑誌掲載の論文名は近代的方法としてもよい。

なお、洋書の柱で書籍名や章のタイトルが全部大文字で書いてあるように見える場合があるが、あれは SMALL CAP という書体の小文字である。

和文については日本エディタースクール編『新版 出版編集技術』上巻（1997年）の該当箇所を、英文については University of Chicago Press: *The Chicago Manual of Style*. 15th Edition（アメリカ英語）か Judith Butcher: *Copy Editing. The Cambridge Handbook*. 3rd Edition（イギリス英語）を参照して下さい。